

春日東西塔院跡出土の文字叩き平瓦

中 川 あ や

はじめに

奈良国立博物館は、昭和四十年（一九六五）に敷地内に所在する春日東塔・西塔院跡の発掘調査をおこない、その際の出土遺物を所蔵・保管している。調査成果の概要については昭和五七年（一九八二）に公表されたが⁽¹⁾、発掘調査成果の全容公開と考古学的研究の深化を目的に据え、近年、改めて出土遺物の整理や出土情報の分析を進めている。出土遺物の中で多くの割合を占める軒瓦については、整理途上ではあるものの、出土型式や出土分布など、一定の成果を公表した⁽²⁾。本稿では、今年度整理を進めてきた文字叩き平瓦について、概要の報告をおこなう。

一、春日東西塔の沿革

春日東塔・西塔は、神仏習合の影響のもと春日大社境内に建立された。西塔は永久四年（一一一六）に関白藤原忠実の、東塔は保延六年（一一四〇）に鳥羽上皇の発願によって建立され、いずれも五重塔で各々の周囲に築地と複廊を巡らせる塔院を形成していたと考えられる。しかし、両塔とも治承四年（一一八〇）に平重衡の兵火により

焼失する。東塔は建保五年（一一二七）に再建されたが、西塔は再建がやや遅れ、宝治年間（一二四七～四八）に完成したようである。その後、両塔とも応永十八年（一四一一）に落雷により焼失し、以後、再建されることなく現在に至る。

二、文字叩き平瓦の概要

春日東西塔院跡で出土した平瓦は三八三点に及ぶ⁽³⁾。大部分は凸面に叩き目を残し、叩き目を残さないものは一割ほど存在する。叩き目は文字、縄目文、斜格子文、平行文、幾何学文など、バラエティに富む。中でも文字叩きは最も多く、全体の七割を占める。文字はいずれも、銘を陰刻した叩き板で凸面を連続的に叩き締めることで凸状に表出されたもので、「西御塔」、「興福寺」、「寺講堂」の3種類である。いずれも西塔院跡からの出土に限られる。

文字叩き平瓦のうち、最も数多く出土したのは「西御塔」銘叩きのもので、字体の違いから六種類に分かれる（図1）。字体のみならず、字の大きさや文字間隔も様々である。この六種類の平瓦の法量を比較すると、全長三一～三二センチメートル前後、挟端幅二二～二三センチ前後、広端幅二四～二五センチメートル前後と、よく似

た値をとる。

一方、「興福寺」「寺講堂」銘叩きのものは出土数が非常に少なく八点しかない。小片ばかりではあるが、「興福寺」銘には四種類(図2-1-4)、「寺講堂」銘には三種類の字体(図2-5-7)を見出すことができる。平瓦の全長や端部幅が判明する資料はないが、厚みは二・五〜三・〇センチメートルであり、「西御塔」銘叩き平瓦の厚みが二・〇〜二・四センチメートルであるのに対し明らかに厚い。厚みに比例して全形も「西御塔」銘より大型である可能性がある。

文字叩き平瓦の出土分布をみると、「西御塔」銘は基本的に築地や回廊の調査区で出土し、基壇周囲の調査区からはほとんど出土していない(調査区については図3参照)。また、銘の字体の違いは出土分布の違いとして明確に現れるわけではない。一方、「興福寺」「寺講堂」銘は少ないながらも基壇周囲での出土に限られ、「西御塔」銘平瓦と対称的な様相を示す。

文字叩き平瓦の年代観については、製作技法の詳細な検討や、周囲の遺跡出土品などとの比較を経て慎重におこなう必要がある。ただ、塔銘を瓦に表示するという意識が共通する有銘軒瓦(「西御塔」、「御西塔」、「東御塔」)が同じ発掘調査で数多く出土しており、それらが鎌倉時代に位置づけられることがわかっている⁽⁴⁾。したがって、文字叩き平瓦についても同時代の所産とみて良いだろう。

三、おわりに―軒瓦の様相と考え合わせて

以上述べてきた文字叩き平瓦の様相について、すでに公表した軒瓦の様相と関連させながら簡単にまとめておく。

西塔院跡において、文字叩き平瓦が多く出土するのは築地・回廊で、すべて「西御塔」銘のものである。塔基壇周囲では「興福寺」「寺講堂」銘のものに限定的である。軒瓦についてもよく似た状況であり、「西御塔」銘は築地・回廊が主で、「興福寺」銘は基壇周囲にほぼ限られる。

東塔院跡においては、基本的に文字叩き平瓦の出土はみられない。軒瓦は「東御塔」銘と「興福寺」銘瓦当の軒瓦が塔基壇の周囲から出土し、築地・回廊ではほとんど出土しない。

東西塔院跡の瓦に関して筆者が注目するのは、東西間の「範」の数の違いである。「東御塔」銘軒丸瓦・軒平瓦は各一型式しかみられないが、「西御塔」銘軒丸瓦は二型式、同軒平瓦は三型式(うち一型式は「御西塔」銘)と複数存在する。先に述べた平瓦の叩き板の範も「西御塔」銘は六種類あるのに対して、「東御塔」銘は存在自体がない。東西で範の数が異なる背景には、南都焼討ち後の再建工事や屋根補修等の際に、瓦製作を請け負った側の事情―例えば、範の数は製作工房の数を反映するなど―が絡む可能性がある。

今後は、文字以外の叩き目をもつ平瓦、そして丸瓦の分析も進めていき、春日東西塔院跡出土瓦の評価を一層深めていきたい。

(なかがわ あや／奈良国立博物館学芸部主任研究員)

註

- (1) 奈良国立博物館『春日西塔・東塔跡の発掘―殿下の御塔・院の御塔―』一九八二年
- (2) 中川あや「春日東西塔院跡出土の軒瓦」『春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究』奈良国立博物館、二〇一七年
- (3) 昭和四十年調査で出土したとされる瓦の出土数は、軒瓦に比して丸平



2



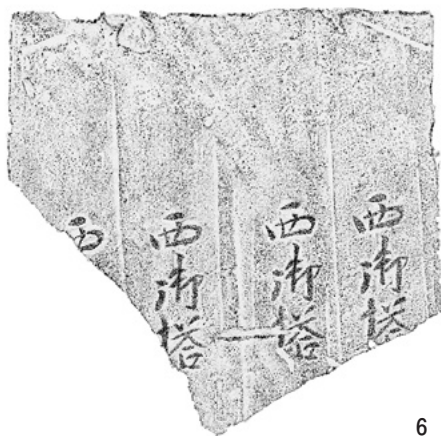
1



4



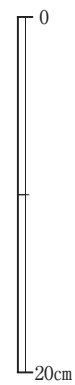
3



6



5



- (4) 註2文献
瓦が少ない。
- (5) 「興福寺」銘瓦当の軒瓦には時間幅が見込まれそうであり、再建時に
まともな葺かれたものであるかは検討を要する。

図1 春日西塔院跡出土「西御塔」銘叩き平瓦

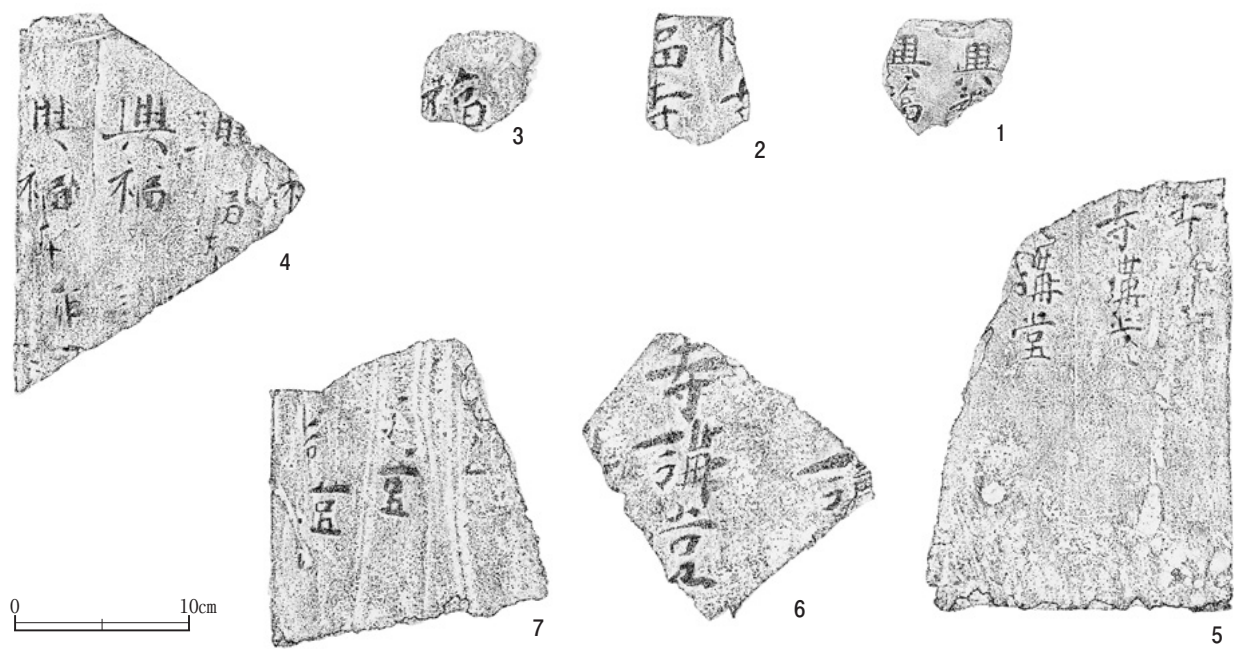


図2 春日西塔院跡出土「興福寺」「寺講堂」銘叩き平瓦

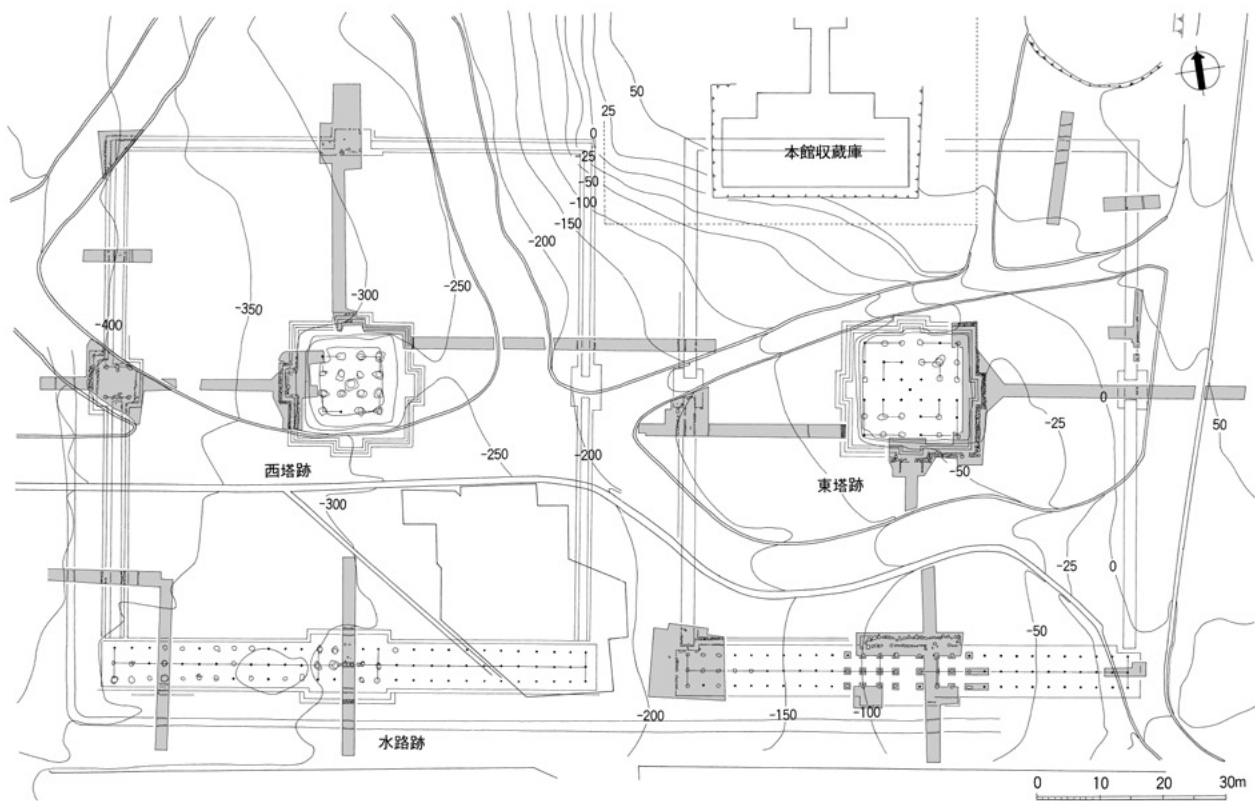


図3 春日東西塔院跡発掘調査トレンチ（昭和40年調査）

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雜集

第二十一号

平成三十一年四月三十日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地